



OKENKAI

日本大学桜門建築会
<http://www.okenkai.jp/>

特集／現役学生が語る今のキャンパスライフ



▲理工学部海洋建築工学科



▲短期大学部



▲生産工学部



▲理工学部建築学科



▲工学部

contents

桜門建築会新会長就任にあたって 岩井光男——2

特集／現役学生が語る今のキャンパスライフ——3

生産工学部・工学部・短期大学部・理工学部海洋建築工学科・理工学部建築学科
研究室紹介——14

親水工学研究室、櫻田・師橋研究室、海洋空間利用研究室、佐藤光彦研究室

桜門建築会創立90周年記念事業のご報告——16

追悼 藤谷陽悦先生——18

事務局だより——18

学部ニュース——19

多様化する現代社会に向けて

岩井光男

国際化、高度情報化が進む現代社会では地球的規模で起こる事象をインターネットやメディアによって私たちは同時進行的に知ることができる。あふれる情報によって日常の仕事や生活、そして個々の価値観も多様化している。都心の街の案内サインも日本語のほか英語、中国語、ハングルが併記されていることが多くなり、ビジネスだけでなく日常生活においても外国人と交流する機会が増えてきている。「多様性」はこれからの地域コミュニティと文化創造の重要なキーワードである。

私が東京丸の内再開発に携わることになった1995年当時の日本はバブル経済崩壊によって経済は停滞し、街は活気を失い、一部のメディアからは「たそがれの丸の内」と揶揄されていた。単一機能的な街であるが故に急激に変革する社会の多様化に対応することができなくなっていたのである。21世紀に向けた街づくりは、これを教訓として業務だけでなく商業・文化施設、交流機能、ホテルなどアメニティのある複合的な街づくりを目指すことになったのである。今年10月1日創建当時の姿に保存・復原された東京駅丸の内駅舎が開業した。建物の長さ約335m、軒高約17mの堂々たる姿を見せる駅舎の周りには連日、建物見物の人びとであふれている。歴史的建築物が街を活性化しているように感じる。

隣接する保存再生された東京中央郵便局舎や駅前広場に面する日本工業倶楽部会館、再現された三菱一号館など丸の内再開発は歴史的建築物の活用によって奥行き深い文化の香りのする街になった。現在の丸の内は経済、文化を中心にグローバルな情報交流の場として再活性化している。戦後の高度経済成長期に多くの歴史的な建築物が経済合理主義のもと、新しい建物に建て替えられた。しかし利便性は向上したが地域コミュニティは破壊され、住民の絆は失われたと言われている。止め処ない利益追求によって私たちは大切なものを失ってしまったと言える。永く継承されてきた建築や街並みには、各世代の多様な文化の重なりと温かい人の心を感じる。

これからの社会に求められるのは世代間の心の交流ではないだろうか。次世代の若者の考え方や行動の多様化は急速に進んでいる。その結果、「世代間の断絶と、格差が問題になっている」と言われている。またメディアはこれからの年金や医療、介護問題を取り上げて日本の将来を非常に悲観的に予測している。今年日本の人口の24%が65歳を超え、その数3000万人以上となる。少子高齢化社会の本格的な到来である。

桜門建築会が日本大学建築系学科卒業生を中心に、学内外の交流組織として90年を超えて今日あることは社会的にも意義深いことである。これからの教員、学生そしてOBなど各世代が集まる桜建会のネットワークによって心の通じ合う人間関係を構築し、世代間のコミュニケーションを高めていくことが私たちの役目であると考えている。この永い歴史を支えてきた先輩方に深く感謝申し上げるとともに、若い力が力強く育っていくことを祈っている。



IWAI Mitsuo
1945年東京都生まれ。70年日本大学理工学部建築学科卒業、三菱地所株式会社入社。2001年から2012年まで三菱地所設計で、三菱地所常務執行役員、三菱地所設計代表取締役副社長執行役員、メック・デザイン・インターナショナル取締役社長などを歴任する。主な作品に、三菱東鴨スポーツクラブ、経団連ゲストハウス、三菱資料館、丸の内ビルディングから三菱一号館における丸の内再開発、JPタワー（東京中央郵便局舎保存再生を含む）など。受賞歴は、日本建築学会業績賞（2005年度）、建築家協会作品選奨、BCS賞、AACA賞、グッドデザイン賞など多数。

現役学生が語る 今のキャンパスライフ

卒業生で構成する会の会報である本誌では、優秀な論文や設計、コンペの受賞といった学生の活躍は紹介されていますが、彼ら、彼女らの声そのまま紹介されることはそれほど多くありません。そこで今号では、卒業から長い時間を経過した会員も多いため、今の現役学生たちのキャンパスライフを紹介する特集を企画しました。「現役学生が語る今のキャンパスライフ」と題して、現役の学生たち自身がそれぞれのキャンパスライフをさまざまな角度から伝えています。校舎などの物理的な環境や、そこで行われている授業だけでなく、学外における活動まで、今の学生たちのリアルなことばを届けます。

4学部5学科から、6人の大学院生、学部生による報告が寄せられました。これを読んでいる卒業生たちにとっては、大きく変わったところ、また、時代が経っても変わらないところなど、さまざまな想いがわいてくることでしょう。現役学生たちにとっても、他の学部や学科のことを知る機会はありません。今回の特集によって、今の学生たちがどんなことを考え、どんな活動を行っているのか、そんなことを知るきっかけとなってくれば幸いです。そして、気が向いたら、ぜひ自分たちの母校を訪ねてみてください。きっとそこには、こんな学生たちが待っていることでしょう。



設計でプレゼンテーション能力が向上
金丸悠紀子

生産工学部



短期大学部
「ワクワク」「ドキドキ」の2年間
高橋小百合



工学部

勉強に集中できる学習環境
関根秀一



理工学部
海洋建築工学科

海洋建築ならではの活動と体験
三好隆正



理工学部
建築学科

駿河台キャンパスの「今」
関口遼子、石田敬幸

設計でプレゼンテーション能力が向上

金丸悠紀子 (生産工学研究科建築学専攻博士前期課程 2年)

桜の美しいキャンパス

生産工学部の象徴といえば、やはり桜です。私が通った小学校も、桜の木が「象徴」としてたくさん植えられていたので、どこか懐かしさと親近感を感じています。春になるとたくさんの桜が満開になり、新入生歓迎会や交流会などでお花見を開催することもしばしば。夜桜も楽しめます。また、風に吹かれて花びらが舞う様子を眺めていると心が落ち着いてきます。夏は虫が多いですが、桜は学生同士や研究室などの交流を深め、結束するのに一役買っています。

生産工学部 60 周年記念棟が新しく建ち、周辺のエクステリアも変わりました。プランターを新たに設置し、椅子などを手づくりしました。以前より、緑が多くなっています。

建築工学科が使用する建物は、主に 4 号館と 5 号館のふたつに分かれています。4 号館は古い建物で、定員約 30 名の製図室が各研究室の隣にあります。5 号館には構造の実験室があり、さらに最上階にはワーク

ステーションという製図室があります。この部屋の定員は約 100 名です。4 号館の製図室は、部屋が小さく使う人の数も少ないですが、隣りが研究室ということもあり、先輩への質問が比較的容易にできます。5 号館の製図室では、設計の授業を受けている学生ならば誰でも使用できるので、指導の先生に関係なく交流がはかれます。

3つのコース別学習

数年前から学生は、1 年次で総合コースと居住空間デザインコースの 2 コースに分かれ、2 年次になると総合コースが建築総合コースと建築環境デザインコースに分かれて授業を受けています。私の学部時代は、1 年次から建築工学、建築・環境デザイン、居住空間デザインの 3 つのコースに分かれていました。

私は、学部時代は居住空間デザインコースに在籍しており、そこでは図面の描き方から、模型のつくり方、「住まう」ということの方まで丁寧に教えていただきました。また、

設計の授業では、毎回みんなの前でプレゼンテーションをしなくてはならず、度胸とプレゼンテーション能力が身につく、自分の考えを発表するということを学びました。さらに、照明デザインやインテリア・家具デザインの授業など、住まいについての授業が豊富にありました。学部生時代は、「住まう」ということと真剣に向き合った 4 年間でした。

現在、総合コースの TA (ティーチングアシスタント) をしていますが、住宅や美術館・オフィスなど設計課題がバラエティーに富んでおり、外観デザインやコンセプトをかたちにしていくことなど、モノをつくる時のプロセスが学べます。また、設計の授業と並行して構造の授業も多いので「設計者の気持ちのわかる施工者」を育てていると思います。

印象に残る授業

ここ数年にわたり、実際にご自身で設計事務所を構えている非常勤の先生が増えてきました。前・後期 2 回ずつ計 4 回担当の先生が変わるた

め、各先生それぞれの考え方や設計のプロセスを身近に学ぶことができます。新たな発見や設計の難しさを体感することで、今までとは違った角度からものごとを見られるようになるのではないかと感じます。

また、建築総合コースと建築環境デザインコースは課題ごとに、居住空間デザインコースは 1 年に 1 回「宮脇賞」として、優秀作品が選ばれ表彰されます。作品の代表者はみんなの前で、設計のプロセスから作品のコンセプト、内部空間など、一からわかりやすく伝えなければなりません。そのことで創作のモチベーションが上がり、プレゼンテーション能力も上がるため、より実践的な授業になっていると思います。

私が構造の授業でいちばん印象に残っていることは、自分でコンクリートを練って養生したこと。大きさは軽量モールド程度だったのですが、その当時、授業で学んだコンクリートについての知識を利用して、自分なりに強度ができるように工夫しました。実際に水セメント比や養生するときの湯の温度など、コンクリートの特性を考えながらつくったことで、教科書を読んだときよりもコンクリートの性質が頭に入り、今でも強く印象に残っています。

大学院の授業と研究室活動

大学院の授業形態は学部の授業とはだいぶ異なります。教科書主体ではなく、各担当の先生の建築に対する考え方や、ものの見方を学ぶ授業が多くなります。また、ほとんどが選択制のため、自分の興味のある分野についてより深い知識や見識にふれることができます。さらに、テストもなくレポートなどが多いため、自分の考えがダイレクトに先生に伝わります。そのため、論理立てて文章を構成する能力が上がると思います。基礎知識があることを前提に、先生の考え方を自分なりにどう理解し、自分の中で噛み砕いていくかに意味があると考えます。

研究室は明確に研究内容や特色が分かれています。そのため、3 年生のゼミや 4 年生の研究室選びでは、自分の興味があるところを選びやすいと思います。

私はゼミの時の研究室旅行で、初めて建築を真剣に見るということを知りました。4 年生がプランを立てた旅行で、まずは建物と建築家についての調査から始まります。バスの中では、今見たばかりの建築についての感想を述べます。感想を述べなければという思いから、どこがどのようによかったのか、どうしてよいと

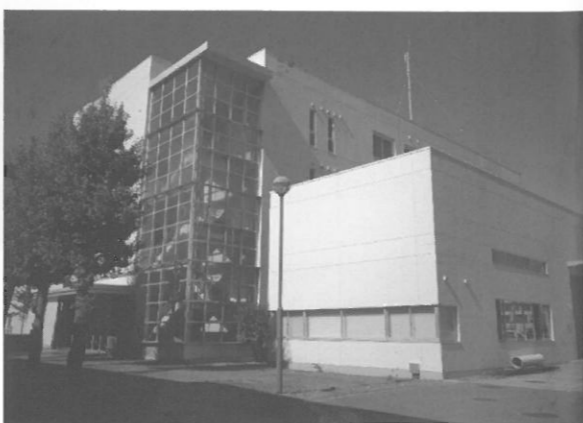
感じたのかなど、深く考えて建築を分析するようになりました。

また、先輩方や同級生が建築をどう見ているかがわかり、さらに、自分が考えたこととの違いや共通点などが確認できるので、非常に勉強になりました。

大学入学から研究へ

私が大学に入って最初に決めたことは、自分の好きな分野、得意な分野を見つけるために、どの授業も積極的に受けることでした。なぜなら私はもともと建築学科にどうしても入学したいと思って入学したわけではなかったからです。そのため、建築の知識はまったくなく、職業のイメージも現場監督や設計といった一般的なものしかありませんでした。そこで、質問などがあれば授業終了後に先生にたずね、興味のあることは図書館などを利用して、調べていきました。先生方も、質問には優しく丁寧に応えてくださいます。そうしていく中で、住まいについての興味も広がり、今では「住まい方」についての研究をすることになったのです。

私はこの学校に在籍している 6 年で多くを学び、成長することができた実感しています。



左/桜越しに見えるキャンパスの風景は圧巻である。中/建築工学科が入っている 4 号館には、研究室と定員約 30 名の製図室がある。右/構造の実験室や約 100 名を収容するワークステーションがある 5 号館
次ページの左/生産工学部 60 周年記念棟。内部に吹き抜けがあり、自然光を取り込む。次ページ右/製図室での授業風景。それぞれの設計コンセプトを発表することで、お互いに刺激となっている



KANAMARU Yukiko
1987 年埼玉県生まれ。2007 年生産工学部建築工学科入学。2011 年同学科卒業、大学院入学。現在、日本家屋の住まい方を研究中。日本の住まい、木造住宅の仕組みについて興味がある。

私は現在大学院博士前期課程2年生で、来年の3月に大学院を卒業します。2007年に大学に入学してから5年以上本校で過ごしてきました。その中で私が活動してきたこと、学んできたことを通して感じた、等身大の工学部とキャンパスライフの一部を紹介いたします。

所属する研究室

私が在籍するコンピューテーション応用力学研究室は、計算力学に基づく構造物や地盤の解析を主な研究内容としています。最近の研究室一丸となった取り組みは、今夏、構内にテンセグリティ構造に基づいたオブジェを製作したことです。

テンセグリティ構造とは、引張力と圧縮力を負担する材のみで構成され、それらの材で自己釣り合い状態が保たれている構造のことです。この構造を研究していた私のひとつ上の先輩が計算力学に基づく解析ソフトウェアを作成し、このオブジェを設計しました。施工は研究室のメンバーで行い、一日がかりで完成させ

ました。

学部生は3年生の後期から研究室に入り、週1回のゼミで構造力学とプログラミングの基礎を勉強します。そして4年生になると各自で研究テーマを決め、先生の指導を仰ぎながら12月の中間発表会に向けて研究を進めます。発表が終わると、卒業論文を完成させるためさらに研究を進めていきます。

また、大学院生は海外での国際会議で研究発表を行い、プレゼンスキルや国際感覚を養うことができます。コンピューテーション応用力学研究室のメンバーはとても仲がよく、一緒にフットサルチームを結成して試合に出たり、時々旅行に行ったりします。研究室を卒業した先輩方や同期生たちは、施工管理職や構造設計職など全員が建築関係の企業に就職しており、学生時代に学んだことが、ダイレクトに自分の仕事に活かしているように思います。

学食と図書館に助けられた学生生活

工学部の学食は、朝の8時半か

ら夜の8時まで営業しており、メニューはあまり多くありませんが良心的な価格が魅力です。2限が終わる12時10分を過ぎたあたりからどっと学生が押し寄せ、特に麺類には長蛇の列ができます。メニューにはラーメンや定食、ランチなどがあり、価格はいちばん高いAランチでも440円で、財布が寂しい学生にはありがたい限りです。

私は毎日11時半頃になると、研究室のメンバーと一緒に出かけ、たわいもない話をしながら食事をし、帰りがけにコンビニに寄ってお菓子を買うことが日課になっています。

夜8時まで開いている図書館は、試験前の追い込み時期や設計課題の制作には非常に助かります。たくさんの資料を広げるために必要な長い机があるスペースや、席一つひとつが区切られていて集中したい時にはぴったりのスペースなどがあり、目的に合った場所で勉強できる点が入っています。

また、1階の雑誌閲覧室は私の個人的な憩いの場所で、さまざまな新

聞やファッション誌、専門誌がそろっており、ソファでくつろぎながらゆっくりと読書をすることが出来ます。研究などで行き詰った時はここに来て、頭をリフレッシュするのが習慣となっています。

大学の周辺には民家やコンビニ、数軒の飲食店がありますが、大学生が楽しめそうなスポットは車で10分ほど行った郡山駅周辺に数か所ある程度です。

私がこちらに引っ越してくる前は、郡山市は東北地方で仙台に次ぐ第二の都市ということを知っていたので、たくさんの繁華街があり、人もたくさんいると思っていましたが、実際住んでみるとあまりの娯楽の少なさに少し落ち込みました。しかしその分勉強に集中して取り組むことができ、学部時代の成績に関してはとてもよい結果となりました。

大震災が起きた時

2011年3月の東北大地震が起きた時は、研究室内ではほぼすべての

パソコンや本が机から落ち、足の踏み場がない状況でした。建物自体も数日間立ち入り禁止になり、私は放射能の影響を恐れて食べ物を買い込み数日間家にこもっていました。そして、那須塩原駅～東京駅間の新幹線が動き出した3月15日の翌々日に実家へ避難しました。

授業は5月から始まり、時々余震に見舞われましたがそれ以外は特に変わりはありませんでした。放射能の問題が出始めてからは、学食のメニューに対して放射能検査がされるようになり、さらに、学内の数か所に放射能測定機が設置され、当時はその数値を毎日確認していたのを覚えています。

就職活動と課外活動

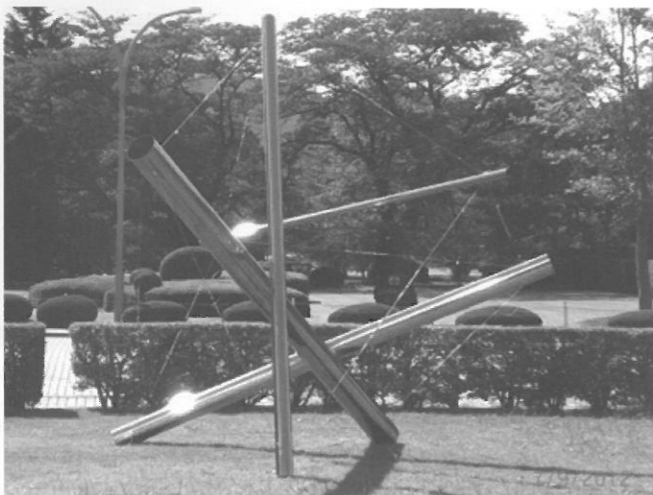
震災後の夏、就職氷河期と言われている中、私の就職活動は始まりました。私は建築学を専攻しているが、目指す業界はIT業界と決めていたので、夏休みから筆記試験対策や業界研究、企業の1日インターン

シップへ参加しました。そして、就職情報サイトがオープンした12月からは50社ほどの企業へのエントリーを行い、そのうち半数ほどの会社の説明会へ行きました。

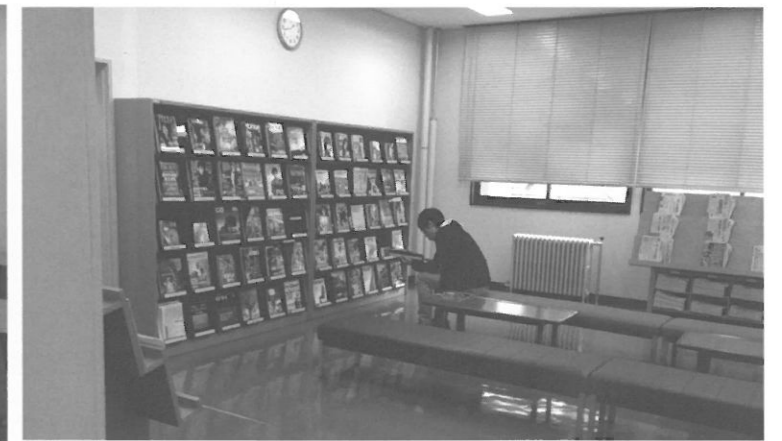
就職活動中は何度も面接で落とされ、落ち込んだりしましたが、失敗から学ぶ姿勢を貫き続けた結果、4月初旬に内定をいただきました。

今年5月、Windows Ambassadorという、日本マイクロソフト株式会社と共同で学生向けにWindows製品のマーケティングを行うことを目的とする団体に所属しました。今年の10月に開催された本校の学園祭・北桜祭では、新しいWindows OSであるWindows 8搭載PCのタッチ&トライブスを出展し、たくさんの来場者に新しいユーザーインターフェースを体験してもらうなど、学生時代にしかできないような体験をすることができました。

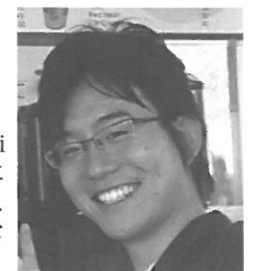
将来は安定した収入を得て、眺望の素晴らしいベイサイド・マンションに住みたいと思っています。



左/研究室のメンバーで、テンセグリティのオブジェを製作する様子。右/完成したオブジェ。素材は研磨したステンレス配管とステンレスワイヤーを使用し、大きさは高さ約3メートル、幅約3.5メートル。キャンパス内の図書館前に展示されている。下/ブントラ先生とともに台湾で行われた第2回構造計算工学シンポジウムの国際会議に参加



上左/ハットNEの1階にある広々とした学生食堂。上右/図書館1階にある雑誌閲覧室は、頭の切り替えができるリフレッシュ空間。下左/研究室のメンバーで構成したフットサルチーム



SEKINE Shuichi
1988年茨城県生まれ。2011年に大学院に入りコンピューテーション応用力学研究室で、有限要素法における梁要素に関する研究を行う。趣味は旅行、動物と遊ぶこと。

「ワクワク」「ドキドキ」の2年間

高橋小百合 (短期大学部建設学科2年)

入学してからアツという間に2年が過ぎようとしています。専門高校からの進学者も少なからずいる環境の中、普通高校で学んだ私は当初、多少の不安を抱いていました。しかし、建築学を専門的に大学で学べると思うとワクワクし、遠い世界のように感じていた建築の世界と向き合っていくこれからの考えるとドキドキもしていました。

実際にキャンパスライフが始まると、クラスメイトは優しく雰囲気よく授業を受け、先生も親身になってしばしば相談に乗っていただきました。講義と演習科目からなるさまざまな分野にわたる授業の多さに目を丸くしたり、そのため履修の仕方に戸惑ったりもしました。そして、設計の授業には徹夜で奮闘し、実験科目には四苦八苦したものです。船橋キャンパスの広さに迷ったことすら

ありましたが、そんな日々にも慣れた今、短大生活を振り返ってみます。

バラエティーに富んだ授業科目

カリキュラムは、計画系、環境系、構造系、福祉系など多岐にわたり、理科系なのに建築史など歴史に関わる授業もあって興味深かったです。「構造の日大」の特色でもある構造系の科目では、講義に付随した演習の授業もあり、ステップを踏んで学びました。先生がわかりにくい点やヒントを提示してくださり、苦手の教科でも面白く感じました。また、サマーセッションやスプリングセッションに再履修の機会が設けられていて、繰り返して取り組むことで、理解を深めることができました。

建築学科や海洋建築工学科など理工学部や他学部の建築系学科の先生がオムニバス形式で講義をする科目

もあり、建築学の幅広さと奥深さを知り驚きもしました。また、学習した実力をはかる教養講座という課外授業もあって、何を覚えていて、何を忘れていたのかを折に触れ確認することができました。

設計の授業は、いちばん面白く、案を考えるうちに毎日が過ぎていってしまうほどに楽しかったという印象です。最初は何もわからなかったのですが、課題への取り組みを重ねるごとに、一段と楽しくなってきました。1年生の後期からは、創作課題が始まるので合評会に出るチャンスができます。合評会でのプレゼンテーションはとにかく緊張しますが、楽しめました。友人のプレゼンテーションが刺激になり、先生とのやりとりは、より深く自分の作品と向かい合う時間ともなりました。

実験系の科目は苦手だったのです

が、得意な友人がリードして必要な作業を進めてくれました。時にはレポートは数十枚にも及びましたが、レポート作成のイロハも同時に学びました。

インテリア計画の授業では、インテリア設計の基礎を学ぶとともに、照明器具の制作もします。身近な環境から空間を演出・デザインしていく過程が少し分かった気がしました。また、1年生の時のオリエンテーションや2年生になってのゼミナールでの建築見学の経験も、よい刺激となりました。

サマーセッションでの体験科目

身体で建築を感じることでできる授業が、夏休み期間中のサマーセッションにありました。合宿して自然素材を活かした家具製作を行うワークショップ科目と、建築系の企業で2週間程度研修するインターンシップ科目、船橋キャンパスでの測量の3科目です。

インターンシップでは、アトリエ系建築設計事務所に受け入れていた

だき、模型づくりや、キッチンスタイル貼りデザイン、イベント会場の制作から片付けまでを体験させてもらいました。さまざまな種類の仕事を同時に進め、問題点があれば解決策を見出し、的確で柔軟に仕事をこなしていく所長の姿がカッコよかったです。もっと建築を知りたいと思い、もっと建築と向き合いたいと思うに至る、本当に充実した2週間でした。

ワークショップでは、八王子の大学セミナーハウスで、竹を使って椅子をつくりました。チームごとに椅子のデザインや材料となる竹をどう組むのかを決めて、竹林に竹を伐採しに行き、節を切り落とし、紐で編むことで椅子を制作しました。実際の制作作業はなかなか思うようにはいかず苦戦しましたが、2日間をかけて椅子が完成した時は、達成感と疲労感が混じり合った感動の瞬間となりました。

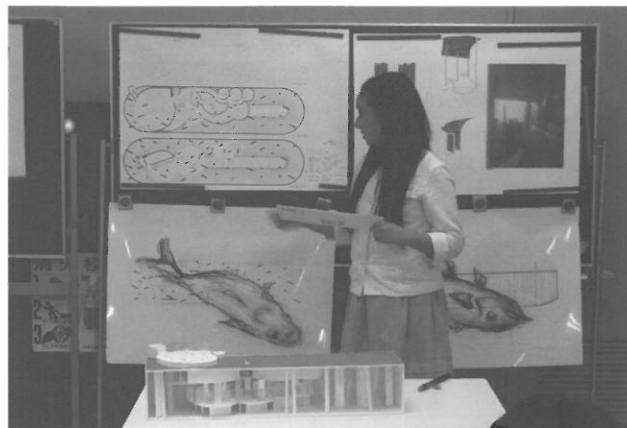
測量では、炎天下の船橋キャンパスで、2週間みっちり測量の実習をしました。いろいろな意味で勉強になりました。

居心地のよい場所

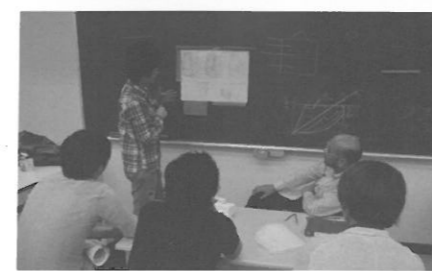
船橋キャンパスには居心地のよい場所がいくつかあります。14号館1階と13号館1階のリーディングルーム、図書館の学習室は自由に利用できます。特に14号館1階のオープンデッキは、天気の良い朝は気持ちいいです。リーディングルームは朝早くから夜10時まで利用でき、自習にもってこいのスペースです。試験勉強やレポート作成によく使いました。

現在、卒業に向けて取り組んでいるのが卒業制作です。2年間の総まとめとして、建築と向き合い、自分と向き合えるなによりの機会と思い、全力で取り組んでいます。

短期大学部建設学科は、今年度から学科名称を建築・生活デザイン学科に変更し、カリキュラムもこれまで以上にバラエティーに富んだものになったと聞きます。アートの視点を含んだ科目もいくつか設けられていて、より幅広い観点から建築を学ぶことができるようなので、ちょっとうらやましく思っています。



上左/設計製図合評会でプレゼンテーションを行う高橋さん。上右/学科オリエンテーションで行われた建築見学のひとこま。下右/建築実験のひとつ、光・色実験の授業風景



上左/ワークショップ科目で制作した竹製椅子を囲んで。上右/インターンシップ科目で取り組んだチャリティバザール会場の設営作業。下/設計科目授業時のエスキース発表



TAKAHASHI Sayuri
1992年福島県生まれ。2011年短期大学部入学、13年度より理工学部建築学科3年に編入学予定。好きなことは、エスキースと料理。

楽しさを実感できる海洋実習

海洋建築工学科には、海洋建築という学科の領域をよりよく理解するために海洋実習というものがあります。ここでは1年生が下田の臨海実習所(生物資源科学部所管)で行う海洋実習Iについてご紹介します。

この海洋実習の目的は、海洋建築工学に携わる技術者として、身に付けておくべき海洋学の基礎と観測方法を体験学習することにあります。私自身入学してしばらくは海洋建築ということあまり実感できませんでしたが、この科目を経験してからは、海洋建築という学問領域や、海と関わることの楽しさを感じられるようになりました。それだけでなく、1泊2日で行うため、ふだんあまり話したこともない同級生と親交を深めるよい機会となりました。

臨海実習所に到着した1日目の午後から開始されるスケジュールは、まず観測船に乗船して、湾内や湾の

沖合で観測を行う船上観測、海岸で水質・風速などを観測する海岸観測、採取したプランクトンのスケッチ等を行う室内講義、これら3種の観測をグループごとに分かれて行います。そして2日目にはGPSと携帯電話を用いた爪木崎の景観調査を行います。

船上観測は位置計測をGPSにより行うもの、水深を音響測深機により行うものがあり、この2つは主に船に装備されたものを読み取るものです。その他に海水の透明度・水色・表面水温・深度別水温などを自分たちで操作して数値を観測するものがあります。

海岸観測でも同じく位置観測を行い、潮位観測や風向・風速や気圧、雲量、表面水温、水素イオン濃度、プランクトンの収集などを行います。収集したプランクトンは別で行われるスケッチにも利用します。プランクトンを今までほとんど観察す

ることもなく、この観測は、この学科ならではのものとなっています。

次に行う景観調査は、学生各自が実際に海岸線の景観や空間を意識し行動することにより、それらに対する理解を深めることを目的として実施されています。景観観測の方法は、爪木崎周辺の決められた範囲の中から、各自が携帯電話で景観の写真を撮影し、設定場所に送信し、撮影した場所をGPSで確認するという方法です。

これらの実習では、ふだんの製図の授業や構造力学等の座学とは違い、海について学び・触れ合うよい機会となっています。入学して間もない1年生前期でのこのような体験は非常に貴重だと思います。

畔柳研究室の竹プロジェクト

この学科では、ユニークな活動をしている研究室があります。そのひとつである畔柳研究室は、課外活動として「BAMBOO PROJECT」という竹を使用した建築物を建てる活動を行っています。この活動は、里山の自然環境を資源化して、空間整備と建設資材の創造を図ることを目的としています。建築業者を中心として、荒廃した里山から本来廃棄される竹を伐り出し、仮設建築物に使用

する資材として活用するビジネスモデルを構築するというを提案しています。このようなビジネスモデルを具現化するため、学生が中心となり、竹の伐採から設計・施工まですべてに携わり、試験的なプロジェクトとして進めている企画です。

この企画は、研究室が毎年学園祭で施工しているアルミの建築物 tsubomi と同形のものを施工し、アルミと竹の空間を比較したことに始まっています。伐採した竹を最大限に活用し、また、自然資材の可能性を追求するために、建材はすべて竹だけを使い、接合部分も竹を使ったピン接合としています。さらに、軽量感を出すなどの工夫を凝らすことで、ディテールやファサードの美しさを追求しています。こうして癒しや温もりが感じられるような空間になりました。このイベントでは、約2000本の竹を伐採し、解体後はそのすべてを竹炭や竹チップに再利用し、無駄なく活用することにより、この企画の趣旨である自然環境に配慮した地球に優しい建築物というのが現実に創出されました。

次の年は竹のシャープなラインを全体的なデザインの魅力として強調した建物を建築しました。見る角度により違った見え方のする壁や、屋根は印象的な影を落として内部空間を演出する働きをしています。また、これらは柱と梁にはめるだけのパネル工法により施工を単純化しています。3年目には、千葉県一宮町で開

催した「eco Surf Cup 2011」に日除け施設と竹筏を提案。日除け施設は2分割した竹材で弓型の構造体を構成し、それを4本組み合わせると一つのユニットとしました。筏は2分割した竹材により浮体となるペットボトルを挟み込んだユニットをつくり、それらを麻紐でつなぎ合わせました。

この筏も地域の廃材を主材料として再利用できる環境に優しいものとなっています。さらに、制作した筏に来場した子どもたちと一緒に乗るなど、地域の人びととのふれあいも実現しています。

アクセステイニングー普及活動

近藤・山本研究室では、「アクセステイニングー」という小型ヨットの普及活動を行っています。毎年7月の「たてやま海まちフェスタ」、9月の「東京夢の島マリーナフェスティバル」、10月「浦安マリーナマリンフェスティバル」、「船橋港まつり」という地域活動に研究室で積極的に参加しています。

このヨットはクリス・ミッチェル

が考案したもので、知的及び身体的障がいをもつ人でも安全にセーリングができるように設計された1~2人乗りの小型ヨットです。誰もが利用できる実用に即したデザインであり、優れたユニバーサルデザインの一例となっています。ユニバーサルデザインは障がいをもった人だけでなく、小さな子どもからお年寄りまでというように、どんな人でも公平に使い、簡単に利用できるデザインで私たちの日常生活を豊かにしてくれるものです。この研究室では、ゼミ生・卒研生として所属する2年間はさまざまな地域のマリンフェスティバルに参加して、アクセステイニングーの普及活動を行います。

このような活動を通して、地域市民とふれあい、海の自然や沿岸域の市町村に存在する海の魅力的な資源を発見していくことにより、研究テーマである地域活性化方策や高齢者・障がい者にもやさしい街づくりについて、実体験として学ぶことができます。これらは他の学科では経験できない海洋建築工学科ならではの活動だと思っています。



上左/船上観察。上右/海岸観察。下左/「BAMBOO PROJECT」の筏をつくる現場。下中/「eco Surf Cup 2011」の来場者に乗せた竹製の筏。下右/「eco Surf Cup 2011」で活用された日除け施設の製作風景



左/「船橋港まつり」に参加して、アクセステイニングーを宣伝するブースをつくる。中/港を走るアクセステイニングー。右/普及活動の一環として、希望者をアクセステイニングーに乗船させる



MIYOSHI Takamasa
1990年静岡県生まれ。2009年理工学部海洋建築工学科に入学。現在、近藤・山本研究室で、災害時の高齢者、障がい者の避難計画や、高齢者・障がい者の社会活動を促進するための社会福祉計画の研究に取り組む。

都心にあるキャンパス

理工学部の学生は船橋キャンパスと駿河台キャンパスに分かれて授業を受けています。それぞれの学科ごとにキャンパスの割り振りが決まっています。1年生の1年間は全学科船橋キャンパス、2年生から駿河台キャンパスで受講する学生と、船橋キャンパスで受講する学生に分かれます。私たち建築学科の学生は1年間船橋キャンパスに通った後、駿河台キャンパスに移り、2年生から4年生までを過ごします。

駿河台キャンパスは千代田区神田駿河台に位置し、JR線、地下鉄丸ノ内線と千代田線が徒歩5分圏内にあり交通の便もとてもよい立地です。周囲にはニコライ堂や、空襲や関東大震災を免れた淡路町の老舗街など、歴史ある建築物が軒を連ねていて、毎日建築の歴史にふれること

ができるとても素敵な場所だと感じています。他にも学生の街ならではの安くてボリュームのある飲食店街も魅力的。カレーやカツ、中華など「がっつり系」が多くあります。「今日はどこにしようか」などと話しながら神保町の辺りをウロウロするのも、キャンパスライフの楽しみのひとつです。

各専門コースの授業

学生は、一般教養科目の他に建築法規、建築材料、建築史、構造力学、設計課題など建築学科ならではの知識を日々学んでいます。

2年生までは全員同じ内容のカリキュラムが組まれていますが、3年生から環境・構造、設計・計画、企画経営といった3つの専門コースに分かれます。コースごとに授業内容も一変します。ただ、どのコースの

カリキュラムにも設計の授業は存在します。学生たちは課題の完成に向けて努力します。案がまとまらない場合は徹夜したり、学校に泊まり込んでいたりして毎週のエスキースに備えています。本音を言えば徹夜は辛いのですが、「自分の納得のいくものをつくるんだ」という気持ちで強く、提出まで踏ん張ります。他の授業と並行して上手くペース配分をしてでき上がった作品には誰しも強い思い入れがあり、講評会の時はその熱い思いがあふれだします。

3つのコースの内、私(関口)は企画経営コースで、都市計画や再開発など不動産系の授業を多く受けています。このコースではマスタープランを読む機会が多く、そこから現在まちづくりに大きな興味もっています。今あるまちはどのような経緯でつくられ、整備されてきたのか。

その土地に住んでいる人びとはどのような想いをもっているのか。良いところも悪いところも知れば知るほど興味をそそられ、現在は学外で地域活動をしています。

地域イベントへの参加

そのような勉学の他に、私たちは理工学部公認サークルの建築写真研究会として学外活動を定期的に行っています。主な活動として月1回ペースで選定した土地の情報を収集して家をづくり、まちを周り、建築物の構造や意匠を写真というフィルターを通して観察するといったことをしています。さらに本年度は10月6、7日に大きなイベントを行いました。JR御茶の水駅前の茗溪通りの商店街の方々と学生が共同で企画運営していく「お茶の水アートピクニック」(以下、OAP)という地域イベントです。他大学の学生も多く参加しましたが、理工学部からはボランティアと私たち建築写真研究会が名乗りを上げました。

私たちが担当したのは、駿河台

キャンパスの裏手に見える「ニコライ堂」と呼ばれる東京復活大聖堂教会。国の重要文化財、そして教会という神聖なる場所、さらに本年度OPAのメインプレイスとしての重要性を考えながら、企画に従事。企画内容として一般の方を招いて未公開部の鐘楼まで案内するツアーと、プラバンとニコライ堂の模型を使ったワークショップを行いました。

ニコライ堂がこのようなイベントに参加すること自体が異例で、今回初の試みだとのこと。交渉段階から茗溪通り商店街の方とOAPのOBの方と私たちで神父さんの元を訪ねました。最初は不安と緊張でいっぱいでしたが、多くの人に支えられ、助けられ、ニコライ堂の関係者と建築写真研究会メンバーのみなんで協力して企画を大成功というかたちで終えることができました。

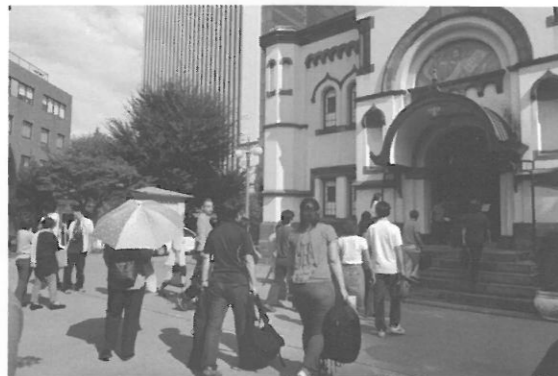
実際に身体を動かして学ぶこと

このOAPを通して、私たちはさまざまなことを学びました。互いに協力し合えば、イベントの成功、絆

や信頼、笑顔、そのような素晴らしいものがたくさん生まれること。めげずに熱意を発信していけば耳を傾けてくれる方が必ずいること。それを評価する方がどこかにいること。

そしていちばん強く感じたのは人の温かさです。この地域の方々の温かさに触れ、神田駿河台という場所がとても好きになりました。「ここが、私の通う大学のある場所です」とみんなに自慢したくなるほどです。それと同時に、まちづくりとはどのようなものか、座学だけで解っていたつもりでしたが、今回実際にまちの方々に触れ、共に努力し、自分なりにその言葉の意味をつかめたと思っています。

私たちは、大学で「学ぶ」ということはただ座って勉学に励むだけでなく、自分の体を動かしてさまざまな人とつながり、学生だからこそできることにどんどんチャレンジしていくことだと思っています。これからもキャンパスライフをさまざまな人と関わりながら過ごしていきたいと思っています。



左/東京復活大聖堂教会(ニコライ堂)。中/ニコライ堂のツアー風景。右/神父さんとの打ち合わせ



上/建築写真研究会が集合したニコライ堂のワークショップ。下/2003年に竣工した理工学部駿河台キャンパスの1号館



SEKIGUCHI Ryoko
1991年東京都生まれ。2010年理工学部建築学科入学。現在企画経営コース。建築写真研究会代表。



ISHIDA Takatoshi
1989年群馬県生まれ。2012年理工学部建築学科編入学。建築写真研究会メンバー。

研究室紹介

研究テーマ 人と水とのかわり

人間と水辺との関係性やその媒介となる建築・都市について環境と防災の両側面から調査研究の実践

研究室名	親水工学研究室
教員名	教授・畔柳昭雄、助教・坪井壺太郎
キーワード	親水公園／親水計画／親水行動／海の家／洪水災害／水辺の環境防災学
企業等への要望	<input type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input type="checkbox"/> 実作・試作等の協力 <input type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input checked="" type="checkbox"/> その他(行政・企業との連携によるプロジェクト立案)

研究概要

本研究室では、「作・造・創」のモノづくりと、「歩く・見る・考える」現地調査を両輪とする研究の基本取組みにおいて、具体的に前者では海水浴のサイトリノベーションや里山・里海の地域間連携に貢献する竹材を使ったまちづくりの実践を行っている。加えて、アルミニウム素材による新しい海の家提案など、構想から設計・施工・運営に至るまでを学生主体で実践している。また後者では、国内外の海岸域・河川流域において綿密な現地調査を踏まえた人と水とのかわりを建築、行動、空間構造から把握する取り組みを行う。さらにこれを「環境」と「防災」の両側面から一体的に把握・検討し、実社会の安全・安心な水辺の建築と暮らしの推進に資する研究を行っている。

近年では、洪水・高潮・津波等の災害に関する地域固有の取り組みと、次代の水辺のまちづくりにむけた提案を積極的に展開すると同時に、地理情報システム(GIS)を用いた沿岸・流域の社会地域構造の変化を踏まえたリスク問題等についても検討を行っている。



上／竹を使った日除けの設計・製作(千葉県一宮市 里山管理保全事業) 下／漁港・漁村の東日本大震災被災地調査(岩手県宮古市)

連絡先◎理工学部 海洋建築工学科(船橋校舎)13号館 4階 1345研究室 URL <http://kuro.ocean.cst.nihon-u.ac.jp/>

研究テーマ 再生コンクリート・溶融スラグコンクリートの構造特性

Green Concrete への取り組み

研究室名	櫻田・師橋研究室
教員名	教授・櫻田智之、教授・師橋憲貴
キーワード	鉄筋コンクリート構造／リサイクル工学／再生コンクリート／溶融スラグコンクリート／付着割裂強度 ／Green Concrete
企業等への要望	<input checked="" type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input type="checkbox"/> 実作・試作等の協力 <input type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input type="checkbox"/> その他()

研究概要

今から47年前の1965年(昭和40)に、500ton構造物試験機が建築構造実験室に設置されました。本体は、高さ7m、幅4.6m、柱の内法間隔3mと当時としてはかなり大型の試験機でした。支柱は、地下4mの深さまで掘り下げたアンカーフレームで支えられており、曲げベッドをジャッキアップしてレール上を移動させると、長さ15mの試験体まで曲げ実験が可能です。試験機はSI単位化により5000kNへの計力盤の標示改造を経て、プリント基板などの電気部品が入手困難となってきたことから、2007年(平成19)に計測制御装置をリフレッシュして健在です。長年愛用してきたこの試験機を利用して、再生コンクリートや溶融スラグコンクリートを適用した鉄筋コンクリート梁部材の付着性状について研究を進めています。環境に優しく、骨材資源の観点からも持続可能なGreen Concreteがどのような構造特性を示すのかについて、実験を繰り返して新たなデータの収集の積み重ねを続けています。

◀500ton構造物試験機を背景に集う2012年度の大学院生と卒業研究生

連絡先◎生産工学部建築工学科 津田沼キャンパス11号館1階
櫻田047-474-2531 sakurada.tomoyuki@nihon-u.ac.jp 師橋047-474-2534 morohashi.noritaka@nihon-u.ac.jp



研究室紹介

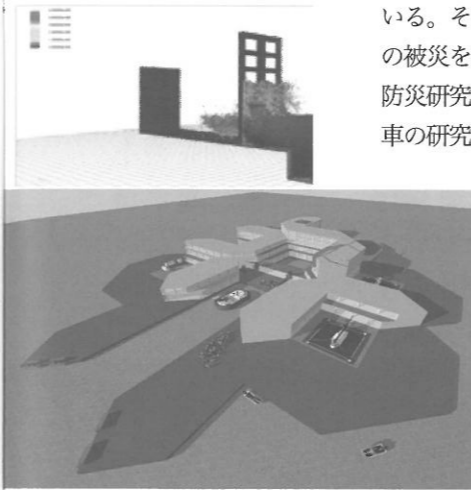
研究テーマ 海洋空間利用技術研究、津波防災対策研究、海洋再生可能エネルギー利用技術研究

研究室名	海洋空間利用研究室(増田・居駒研究室)
教員名	教授・増田光一、准教授・居駒知樹
キーワード	浮体式構造物、津波・波力発電、潮流発電、浮体式洋上風力発電、数値シミュレーション、超大型浮体施設
企業等への要望	<input checked="" type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input checked="" type="checkbox"/> 実作・試作等の協力 <input checked="" type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input checked="" type="checkbox"/> その他(陸海一体型津波ハザードマップ開発および地域防災計画への津波対策の考慮。地域活性化およびグリーン事業における海洋再生可能エネルギー導入計画立案と技術検討)

研究概要

本研究室は、海洋波中における浮体式構造物の挙動解析や耐波性能評価技術をベースとした研究を実施している。その応用として①津波による港湾浮体施設・構造物の被災と陸上構造物への二次被害の検討、②陸海の被災を考慮した津波ハザードマップ解析、③津波による強非線形浮体挙動解析法の開発に代表される津波防災研究を実施している。また、④高効率波力発電装置の研究開発、⑤高効率潮流・海流発電用垂直軸型水車の研究開発、⑥洋上風力発電用浮体の波浪中性能評価等のような海洋再生可能エネルギーを利用するための構造物・装置の研究を実施している。さらに、これらすべての技術をシステム化して海洋空間を有効に利用するための、⑦海上医療支援浮体の立案と設計、⑧海洋エネルギーおよび海洋資源利用のための大型洋上浮体施設の立案と設計、を実施している。これら幅広い研究のために、理論計算と数値シミュレーション技術の開発を行いながら、24m×7mの平面水槽と30mの2次元水槽を活用した水槽模型実験を実施している。

上／MPS法による建築物への津波荷重シミュレーション
下／浮体技術と海洋再生可能エネルギー技術を統合した医療支援浮体システム
連絡先◎理工学部海洋建築工学科船橋校舎13号館4階 TEL047-469-8347、047-469-5482



研究テーマ 震災復興公営住宅

宮城県石巻市半島部における高台移転にともなう景観形成、および復興公営住宅の計画

研究室名	佐藤光彦研究室
教員名	教授・佐藤光彦
キーワード	建築設計・計画・研究／景観／環境
企業等への要望	<input checked="" type="checkbox"/> 共同・受託研究の要請 <input checked="" type="checkbox"/> 実作・試作等の協力 <input type="checkbox"/> 研究成果の事業化等 <input type="checkbox"/> その他()

研究概要

本研究室では、実施につながる設計や現場に触れる機会を重視しながら、研究、設計活動を行っています。愛媛県八幡浜市で開催された東屋のコンペでは最優秀賞に選ばれ、設計、モックアップによる検証、市民と協働しながら施工までを行いました。現在は、新築住宅やリノベーションの設計、近代住宅の研究などが進行中で、3.II以降は震災復興プロジェクトにも注力しています。

宮城県石巻市の雄勝半島において、他大学と連携しながら、被災地の残存住宅のサーベイやヒアリングを行い、高台移転地における宅地造成の計画や助言、復興公営住宅の計画に参画しています。これまでの公営住宅のような標準設計ではなく、リアス式海岸の中に散在する集落の生業や、さまざまな微地形や気候の多様性に適応する設計と供給計画が必要であり、将来を見据えた出口戦略も要求されます。地域の固有性に対応しながら、被災地の未来に貢献する新たな公営住宅の可能性に取り組んでいます。



コンペで最優秀賞に選ばれ、愛媛県八幡浜市で実際につくられた「かまぼこカーテン」

連絡先◎理工学部建築学科駿河台校舎5号館8階 TEL03-3259-0714
E-mail 佐藤 m.sato@arch.cst.nihon-u.ac.jp

桜門建築会創立 90 周年記念事業への ご協力の御礼ならびに募金事業のご報告

日本大学桜門建築会会長 岩井光男

この度の桜門建築会創立 90 周年記念事業の募金に際しましては、お心のこもったご協力を賜り、誠にありがたく深く感謝申し上げます。

おかげさまで、募金の目標額を達成することができ、記念事業はすべて計画通り、執り行うことができました。主なものといたしましては、「記念フォーラム」と「記念懇親会」、そして「90 周年記念特別会報 (CD-R)」も作成することができました。厚く御礼申し上げますとともにご報告申し上げます。

建築界をとりまく環境のたいへん厳しい時に、多くの会員より賜りましたご協力に対し、ここに改めてその責任の重さを痛感いたしますとともに、私たちはより一層、桜門建築会の意義と目的を認識し、互いの絆をさらに強固なものとし、日本大学発展のため、そして桜門建築会の活性化のため、さらなる努力を重ねてゆく所存でございます。

なお 90 周年記念事業特別会計収支につきましては、5 月末までの状況を以下に記しますが、決算完了後、改めてご報告申し上げます。



募金事業報告

(平成 24 年 5 月末日現在)

会員種別	件数	募金入金額
特別維持会員	121 件	1,516,111 円
正会員	42 件	143,000 円
企業	15 件	1,850,000 円
手数料		- 27,980 円
合計	178 件	3,481,131 円

桜建会報 NO.95 2012-December
 発行人 岩井光男
 編集 桜門建築会広報委員会
 〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14
 日本大学理工学部内

広報委員会
 委員長 佐藤慎也 (理工学部建築学科)
 副委員長 大川三雄 (理工学部建築学科)
 塩川博義 (生産工学部建築工学科)
 委員 山本和清 (理工学部海洋建築工学科)
 亀井靖子 (生産工学部建築工学科)
 プンタラ・S・ガン (工学部建築学科)
 矢代真巳 (短期大学部建設学科)
 大西正紀 (mosaki)
 西山麻夕美 (フリー編集者)

桜建会事務局
 住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、
 会費、名簿など桜建会全般についてお気軽に
 ご連絡、お問い合わせください。
 理工学部5号館7階574A号室
 TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216
 E-mail kaiin@okenkai.jp
 ホームページ http://www.okenkai.jp/
 専任/星野麻衣子
 非常勤/桜井佐和、大木明子
 業務時間/AM10:00~PM5:00(月~金)

募金をしていただいた方々(五十音順・敬称略)

正会員

天野 辰雄
 石橋 毅
 泉田 英雄
 井上 武司
 上田 隆章
 上原 松壽
 内山 敏行
 浦山 紀幸
 海老原 昭浩
 大槻 博太
 奥田 真治
 小倉 正寛
 梶井 銀二郎
 加藤 敏広
 加藤 宏承
 金子 正治
 金光 秀明
 樺田 直樹
 鎌崎 宣好
 亀井 正治
 河津 章夫
 川端 康臣
 木田川 清
 木村 宏允
 清古 高志
 谷澤 賢
 手島 利貞
 寺尾 昇人
 長坂 守康
 野崎 俊人
 長谷川 徹
 濱田 隆彦
 林 三郎
 樋口 知以
 樋渡 敬之
 廣部 剛司
 増田 善計
 見沢 孝一
 水谷 孝夫
 宮田 勲
 村田 松衛
 矢代 一雄

特別維持会員

赤谷 達樹
 秋山 宏
 朝倉 光正
 安達 俊夫
 安達 洋
 渥美 眞一
 安孫子 政夫
 池永 博威
 市川 毅
 井上 勝夫
 今村 正樹
 岩井 光男
 岩崎 俊治
 宇於崎 勝也
 宇杉 和夫
 宇都宮 博
 内海 康夫
 海老沼 一夫
 大内 達史
 大川 三雄
 大島 和義
 大根 律久
 大瀧 嘉彦
 大森 勝美
 岡田 章
 小川 保
 沖田 章喜
 笠原 作磨
 片桐 正夫
 加藤 賢三
 加藤 幸三
 加藤 紀一
 加藤 文雄
 金子 修司
 川岸 梅和
 神田 孜
 岸本 孝一
 北村 均
 木下 靖子
 公塚 正行
 木村 靖彦
 櫛原 光生
 黒田 清行
 小石川 正男
 小林 昭男
 小松 博
 腰塚 達郎
 齊田 和男
 斎藤 茂暢
 斎藤 丈士
 斎藤 公男
 崎山 繁樹
 佐藤 健吉
 佐藤 慎也
 佐野 豊
 塩川 博義
 重枝 豊
 柴山 武
 鳥澤 敏一
 下青木 義紀
 白井 伸明
 新宮 清志
 進藤 芳明
 菅又 滋
 副島 勇市
 高澤 恒男
 高橋 存
 高原 要
 田島 達也
 多田 博是
 田所 武士
 月永 洋一
 坪井 善道
 出村 克宣
 寺久保 恒夫
 土岐 正身
 飛内 圭之
 都祭 芳明
 冨田 隆太
 外山 勉
 永井 香織
 中田 久雄
 中田 善久
 中西 三和

賛助会員・企業

株式会社伊藤喜三郎建築研究所
 岩崎電気工事株式会社
 鹿島建設株式会社
 川北電気工業株式会社
 古久根建設株式会社
 サンユー建設株式会社
 大成建設株式会社
 大成サービス株式会社
 ダイダン株式会社
 TSUCHIYA 株式会社
 株式会社中村設計
 株式会社フジタ
 株式会社三菱地所設計
 株式会社山下設計
 有限会社レモン

追悼

本年、7月23日に生産工学部教授の藤谷陽悦先生がご逝去されました。享年59歳の若さでした。藤谷先生は、神奈川大学の出身で、大学院の時に山口廣先生の門をたたかれ、以後、生産工学部の建築史研究室の軸として活躍されてきました。

私が先生と親交を深めたのは、工学院大学の初田亨先生と3人で『建築知識』誌の連載「近代和風を探る」を担当したのがきっかけです。執筆者それぞれが3人の写真家とペアを組み、全国に残る近代和風建築の名作を訪ね歩く作業は、大変に充実した思い出深いものとなりました。文部科学省の主導による全国の近代和風建築の調査では、東京都と千葉県、そして群馬県の調査をご一緒にやらせていただきましたが、群馬県の調査研究と報告書の作成は、闘病生活と重なり、最後の力を振り絞って取り組まれたものです。

藤谷先生が特に関心を寄せてきたのは郊外住宅地研究の分野です。恩師である山口廣先生の主導でまとめられた『郊外住宅地の系譜』（発行/鹿島出版会）をきっかけに、学位論文も同様のテーマを追求、さらに全国の研究者に呼びかけて『近代日本の郊外住宅地』（発行/鹿島出版会）という本をまとめられています。またライフワークとして英国の郊外住宅地の研究にも取り組まれていました。

ご遺族のお話ですと、病院から自宅に戻ることを促すと、途中で“研究室”に寄ってほしいと応えられたそうです。おそらくやりかけた仕事のことが気になっていたのでしょう。最後の最後まで研究者としての誠実な姿勢を貫き通した生涯でした。

ご冥福を心より願っております。

大川三雄（理工学部建築学科教授）



藤谷陽悦先生

生産工学部教授 享年59歳

事務局だより

第32回と第33回の建築講座を開催

第32回と第33回の建築講座を本年11月13日、14日に行った。第32回建築講座は、日本大学名

誉教授の神谷宏治先生、斎藤公男先生を講師にお迎えして、「世界的名建築を“ばら・す” - 「国立代々木競技場」の誕生秘話をめぐって -」をテーマに講演。

第33回建築講座は、(株)ジェイ

アール東日本建築設計事務所の田原幸夫氏を講師にお迎えして、「重要文化財・東京駅丸の内駅舎の保存・復原・活用」をテーマに講演された。両日とも多くの参加者が来場し、盛會に終わった。

2012年度特別維持会懇親会開催

本年11月14日(水)19時より、御茶ノ水の東京ガーデンパレスで、今年度の特別維持会会員懇親会を開催した。昨年と同じように「桜建ふれ

あい2012」と称して、個人会員から寄せられた作品パネルを展示し、出席者72名の盛會となった。

新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (平成24年6月12日~11月13日) 5名

飯田隆弘	理工海-63	(株)三菱地所設計	有田正志	生産工-47	(株)陣設計
油浅耕三	工-41	新潟工科大学名誉教授	浦進悟	理工建-48	(株)大林組
山崎哲	生産工-55	日本建築検査協会(株)			

訃報

本年11月22日に、前会長の片桐正夫名誉教授が急逝されました。長年にわたり当会の活動にご尽力

いただきましたことに感謝するとともに、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

学部ニュース



トピックス

◎サンジェイ・パリーク准教授は、5月8日に論文名「連結材ユニットを用いた自己修復コンクリートのRC構造物への適用に関する実験的検討」で、日本コンクリート工学会東北支部論文賞を受賞した。

◎浦部智義准教授は、一連の仮設住宅群の設計で「2012年グッドデザイン賞」、ならびに「日本ログハウス・オブ・ザ・イヤー」の最優秀賞を受賞した。



トピックス1

◎生産工学部の創設60周年記念式典が千葉市のホテルで10月20日に開かれ(出席者309名)、学部長である松井勇教授があいさつを行った。

◎第11回韓国・日本建築材料施工JOINT SYMPOSIUMにおいて、松井・永井研究室に所属する野村生君(M2)の論文「光と影による凹凸仕上面の見え方-幾何学立体の輝度分析-」が優秀論文賞を受賞した。

◎日本建築仕上学会主催の日本建築仕上材料技術・デザイン競技2012「新しい建築空間を実現する建築仕上材料とその技術提案」において、松井・永井ゼミナールの3年生4名が優秀賞、佳作を受賞した。「優秀賞」は、那須佑輝君で、論文タイトルは「サーモクロミズの仕上げ剤」、「佳作」は成田翔平君、野地高史君、山口徹君たちの「House of moss」である。



建築学科トピックス1

◎日本建築学会九州支部が主催する「2011年度第5回建築九州賞(作品賞)」で、佐藤光彦教授の「熊本駅西口駅前広場」がJIA特別賞を受賞した。受賞対象作品は、九州新幹線開業に合わせて竣工した駅前広場で、「特に地域の建築についての独自の視点や新しい意匠並びに技術の提案が評価される作品」として選出された。

◎岡田智秀社会交通工学科准教授、横内憲久教授の論文「海岸空間とその背後空間を一体的に捉えた新たな海岸まちづくりに向けて 米国ハワイ州の“海岸線セットバックルール”に着目して」が「2011年 年間優秀論文賞」(主催/日本都市計画学会)を受賞。本論文はハワイ州で取り組まれている海岸まちづくりの防災手法である、海岸線セットバックルールの内容とその効果について報告したものだ。

◎加藤千晶さん(重枝研M1)の卒業論文「長谷寺本堂建地割図を用いた本堂計画手法の解明に関する研究 江戸初期再建社寺建築の計画手法に関する一考察」が、「2012年 日本建築学会 優秀卒業論文賞」(主催/日本建築学会)を受賞した。本論文は、長谷寺本堂の計画図面が3案残されていたことから、それらが現状に対してどのような影響を及ぼしたかをたどり、当時の建造物のデザインを研究したものだ。

◎三橋博巳非常勤講師(元教授)が、日本不動産学会会長に再任された。3期目の任期は2012年5月から2年間。



海洋建築工学科トピックス

◎建築再生展組織委員会・株式会社テツアドー出版主催の設計コンペ「我慢”を考える」において、佐藤研究室所属の松井創斗君(M2)・齊藤亮介君(4年生)・山川大喜君(3年生)・川崎将君(3年生)のグループ作品が入選を受賞。作品コンセプトは区画いっぱい建つ家々の中で「大きくつくる事」を我慢し、小さくした残りの空間を考えることで“我慢する”ことの先にある尊いものを、もう一度見つめ直すというものである。

◎アートラボあいち・ALA建築Project主催の設計コンペ「都市と空き地」で、本学科の松井創斗君(M2)・辻普君(3年生)・堤昭文君(3年生)のグループ作品が3位入選を受賞した。

◎日本建築学会主催の建築設計競技「あたりまえのまち/かけがえのないもの」で、杉田陽平君(M2)・杉山洋太君(M2)・松井創斗君(M2)のグループ作品が関東支部入選を受賞した。作品コンセプトは、新たな住宅地開発のために山を切り、崖をコンクリートで固める計画に反対するもので、「崖に人が棲む」ことにより、土を活かし里海の循環を保ち、豊かな環境を創り上げるシステムを提案している。

◎近藤・山本研究室は、館山市で開催された「たてやま海まちフェスタ2012」、船橋漁港で開催された「第6回船橋港まつり」で、研究室所有のアクセスディンギーによる市民を対象とした体験乗船会を実施し、アクセスディンギーの普及・啓発活動を行った。◎近藤健雄教授は、11月15日、茨城県の海岸の水辺環境創出と地域の活性化を図る目的で開催した「第26回茨城県水際線シンポジウム」で、有識者代表として基調講演を行い、パネルディスカッションの司会を務めた。



◀生産工学部創設60周年記念式典であいさつされた松井学長



建築学科トピックス2

◎落合正行理工学部研究所研究員、山中新太郎助教、大塚秀三ものつくり大学講師、宮里直也助教、長島早枝子さん(山中研 M2)、杉本将平君(同研究生)、矢嶋宏紀君(同 M1)の「農業廃材を有効利用した OSSB 麦わら成型合板の可能性 自立型建築仕上材料を目指して」が、「建築仕上材料技術・デザイン競技 2012 最優秀賞」(主催/日本建築仕上学会)を受賞。本賞は「今後の建築空間の発展と進化を見据え、より革新的で技術的にも意匠的にも興味深い建築仕上材料のデザイン・技術を提案する作品」に授与される。

◎朝倉亮君(山中研 M1)、塚越望さん(佐藤光彦研 M1)と山本匡希君、斎藤大亮君、町田昴弘君(今村研 M1)の2



▲▶新病院建築企画提案コンペティションで人賞した作品パース



グループが、「新病院建築企画提案コンペティション 入賞」(主催/医療法人財団 岩井医療財団)を受賞した。本賞は、「近未来の整形外科病院にふさわしい提案」が求められたもの。

◎四元仁美さん、落合俊行君、高野和哉君(4年)、飯名悠生君(3年)の案がコンペで選ばれた海の家「カフェドロペラメール」が、7月から約2か月間、神奈川県三浦郡葉山町の一色海岸に建設された。

◎本岡順二郎名誉教授が「駿博功労賞」を受賞した。本賞は、理工学部教職員および校友で博士号を有する者による駿博会により新たに創設されたもの。



トピックス2

◎第12回住宅課題賞(参加校は34大学44学科)で、居住空間デザインコース4年生小出杏の「集合住宅」(3年次後期課題、指導/木下庸子、木下道郎)が第3位を受賞した。

◎藤本利昭准教授は、『コンクリート充填鋼管構造設計ガイドブック』(共著、発行/日本建築学会)を2012年10月に刊行した。本書は初学者向けの書籍で、刊行にあたり東京・名古屋・大阪で講習会を開催。藤本先生は東京・名古屋の2会場で講師を担当した。

◎川島晃教授は社会貢献活動の一環として、エッフェル塔のTV番組制作における取材協力と資料提供およびナレーションにかかわる技術指導を行った。番組制作会社はテレコムスタッフで、9月22日にNHKのTV番組「検索deゴー!」としておき世界遺産お国自慢SP)の中で放映された。



◀屋外に展示した、OSSB 麦わら成型合板を活用した自立型建築仕上げ材料。(写真/加藤雄生) ▲神奈川県の一色海岸に実際に建った、コンペで入選した海の家「カフェドロペラメール」(写真/大西正紀)



▲▶第12回住宅課題賞で第3位を受賞した「集合住宅」の模型



トピックス

◎高田康史副手、小石川正男教授、保坂裕梨助手、連名の「Ogikubo Sharing - 共有する文化が未来を描く -」が、「杉並区区制施行 80 周年記念 これからの荻窪駅周辺まちづくりを考える アイデアコンペ」(主催/東京都杉並区)において金賞を受賞した。「今後の10~20年を見据えて目指すべ

き荻窪駅周辺のまちづくり」をテーマに提案が求められた。

◎矢代眞己准教授は、翻訳著書として『建築家へのABC(原著者ダグ・パット)』を、鹿島出版会より出版した。この本は建築家とは何者なのか、その実像をAからZまでの26のトピックスで描き出した一冊。

